

Title	書評：中野紀和著『小倉祇園太鼓の都市人類学： 記憶・場所・身体』古今書院、2007年
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009. ) ,p.129- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0129">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0129</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評：中野紀和著

『小倉祇園太鼓の都市人類学—記憶・場所・身体—』古今書院、2007年

有末 賢

---

都市祭礼研究に新しいスターが誕生した。中村孚美氏以来の女性の研究者である。中野紀和氏の『小倉祇園太鼓の都市人類学』は、非常に目配りの利いた質の高い博士学位論文の公刊である。小倉八坂神社の祭礼、小倉祇園太鼓と言っても、それほど多くの人に知られている「祭り」という訳ではないであろう。京都祇園祭とか、浅草三社祭とか、博多祇園山笠とかの伝統的でかつ観光的にも大きな都市の祭礼と比較すれば、規模は明らかに小さい。しかし、それでも350頁もの分厚い記述は、すべて「小倉祇園太鼓」の都市祭礼に充てられている。よくまあ、これだけ細かい内容を調査し続けたものだ、という感慨もある。しかし逆に言うと、研究対象がそれほど有名ではなくても、人類学・民俗学の調査研究はいくらでも深く掘り下げることができるという良い見本だとも言える。

本書は、第Ⅰ部が、「都市祭礼の重層性」と題されて社会的側面から集団の変遷や組織の在り方が分析されている。第Ⅱ部は、「ライフヒストリーからみた地域伝統」として、室井さん、中田さん、伊藤さんという三人のライフヒストリーが展開されている。そして第Ⅲ部は、第Ⅰ部の都市人類学的視点からの祇園太鼓全体の把握と、第Ⅱ部のライフヒストリー・アプローチを受けて、両方を交差させた結果として「都市における文化の動態」という分析がなされている。この3部構成に、研究の目的、先行研究の概観などの序章と、「場所」としての都市、という結章が前後についており、いわば「博士論文」の模範例（パラダイム）のような論文構成である。

本書の長所はたくさんあるが、ただ1点だけ指摘したい。それは、都市祭礼の「総合的世界」を見せてくれることである。「小倉祇園太鼓」という都市祭礼をめぐる、さまざまな事実や情報、アプローチや分析視角が繰り広げられる。読者は、一つの都市祭礼調査を読むだけでなく、本書からいくつもの都市人類学、民俗学、社会学、生活学の知識を得ることができる。本書にも引用されているが、私（評者）は、1980年代に、東京の佃・月島の都市祭礼調査を行い、「都市祭礼の重層的構造」という論文を執筆した。また、それとは別にライフヒストリー研究をも志し、生活史研究の方法論や意味論などの論文も書いている。その意味で、中野氏と関心が重なっているが、もしも「ライバル」関係として考えた時には、明らかに私の方が「嫉妬」を覚える立場である。学問研究においては、後にスタートした者たちへの「嫉妬」の気持ちは常にあるが、この場合でも、先行研究の成果を超える試みが実を結んでいる。私の場合には、中野氏の第Ⅰ部に相当する部分しか展開できなかつたし、「小倉祇園太鼓」は「佃祭り」とは異なる

とは言え、「有志チーム」も企業も出てくるし、映画「無法松の一生」の影響や「平成無法松物語」(テレビ番組)のモデル・伊藤さんのライフヒストリーなどメディアとのかかわりについても調査されている。さらに、都市祭礼におけるジェンダーの要素や聴覚障害者・片本氏へのインタビューなど、中野氏の調査研究の幅の広さは見事である。読者は「小倉祇園太鼓の世界」を分析視角(パースペクティブ)とともに、その地平線の彼方まで見通すことができるのである。

本来ならば、本書に対してもっとたくさんの賛辞を述べたいところなのだが、これは「リプライ付き書評」であるらしい。中野氏がリプライを書くためには、評者が本書に対して質問や疑問点を挙げなければならない。賛辞ばかりでは、リプライを書く必要がなくなる。そこで以下に3点ほど問題点を提起したい。それは、本書の副題となっている「記憶・場所・身体」というテーマについてである。この順番を逆にして論じてみたい。

第1に身体という問題である。中野氏は、都市祭礼に見られる身体や感覚や意識に対して、非常に敏感である。このことは、聴覚障害者の太鼓打ちの修練や視覚を介した伝承や「太鼓の音」など柳田國男の『明治大正史世相篇』における「新色音論」を思い起こさせるほどである。しかし、身体の問題の重要性は、必ずしも個人のレベルだけではなく、社会的レベルにおいて「身体の統制」が働いているという事実ではないだろうか？つまり、町内レベルにおいても、有志チームにおいても、企業や行政や観光化においても、太鼓の打ち方、太鼓の音、祭りの時間・空間統制においても全体として「身体の統制」が行われている。祝祭性の発露から見ると、「身体の爆発」と「身体の統制」のせめぎあいこそが都市祭礼でもある。男性の打ち方、女性の視線、女性の太鼓への参加、女性へのまなざし、などなど身体を通したジェンダーとセクシュアリティへの分析ももっと必要ではないだろうか。さらに、ライフヒストリーにおける身体の問題も中野氏の分析からはあまり出てこない。ライフヒストリーは、本来「身の丈」に応じた対話的な調査法である。3人の話者とそれぞれの奥さんからライフヒストリーを聞き取りしているのだが、身体的要素はあまり出てきていない。これは、記憶の問題ともかかわるが、ライフヒストリー・インタビューは、調査者と話者との間に相互に身体的介入が起こるところに特徴がある。ライフヒストリー調査を行っているとき、話者との対話の中で、ある事に関して、あるいはある時点から記憶が鮮明に蘇って、その時の経験や感情がほとばしるように湧き上がってくることもある。身体を介した相互作用であろう。この小倉祇園太鼓の調査から中野氏は、調査者と被調査者の相互の「身体」レベルの問題をどのように考察するのだろうか？

第2に「場所」の概念である。中野氏は、場所性(placeness)と非場所性(placelessness)を対比して、「民俗としての太鼓」と「音楽としての太鼓」「ノイズ(騒音)としての太鼓」に分類している。また「結章『場所』としての都市」では、「画一化が進み、多様な意味付与を許さない空間に都市が覆われていく可能性は否定できない。だからこそ、場所への欲求が強く働き、さまざまなレベルでの差異化が生じる。「都市的なるもの」とは場所への欲求が生み出す動きの中に表われる。場所としての都市は、自らを内側に位置づけようとする重層的な動きのな

かに浮上する。それは、没場所性を乗り越える不断の営みでもある。」(332頁)と述べられている。しかし、場所性と非場所性を二分し、都市性をどちらの文脈にも載せてしまうと混乱が生じてしまう。「音楽としての太鼓」と「騒音としての太鼓」が同じカテゴリーに入ってしまうのは、明らかに矛盾している。この問題を解決するためには、地域性 (locality) という概念を入れて考える必要があるだろう。例えば、「民俗としての太鼓」は、中野氏が第 I 部で考察した「地域伝統」であり、「音楽としての太鼓」は都市化、情報化が進む今日の有志チームや派遣されるパフォーマンスである。しかし、「騒音としての太鼓」となると、画一化される都市空間や郊外住民において、地域性を否定した新住民や祭りに入れられない弱者であるかもしれない。つまり、場所性と非場所性の間に、地域性を加える必要が出てくる。都市空間の意味は、多様な都市住民にとって、場所的でもあるし、非場所的でもある。「場所への欲求」もあれば「非場所への欲求」も存在している。都市祭礼の重層性とは、地域性を核にしなが、場所と非場所を柔軟に使い分け、飼いならしていくことではないだろうか？場所についての中野氏のさらなる人類学的・民俗学的分析を期待したい。

第3に「記憶」についてである。直接的には「第12章 生成される記憶」で取り上げられているが、本書全体では3人の話者(及びその妻)のライフヒストリーとも関連している。中野氏は「場所の記憶」というコンテキストにおいて記憶を捉えているが、私の観点では、(1)個人的記憶、(2)世代的記憶、(3)集合的記憶のそれぞれのレベルが存在しているように思われる。中野氏は、(1)個人的記憶と(3)集合的記憶を並べながら、「小倉」という場所の記憶に結びつけている傾向が強い。もちろん、「小倉祇園太鼓」という祭礼を通してインタビューをしたわけだし、個人生活史の全体や家族、コミュニティ、地域社会の全体にわたる記憶を社会史のように記述しようとしているわけではないのは理解できる。しかし、「記憶」は個人的なものであると同時に、家族や同時代、同世代で共有されるものでもある。中心地域の町内で育った19歳の女性の語りは、「同世代」として有志チームの太鼓打ちに共感しており、親の世代とは一線を画している。もちろん、逆に親世代と同一化する室町や京町の若い人たちもいるかもしれない。「集合的記憶」となるためには、個人の記憶が集合されなければならないが、その集合の仕方は、まちまちである。「小倉祇園太鼓」の伝承という本書のテーマからすると、「世代的経験」と「世代的記憶」は鍵概念になるかもしれない。記憶は、語りの場で生成されることが多いが、伝承の場面もオーラルな状況での継承が普通である。そうであるならば、世代経験や世代的記憶は、民俗の伝承にとって重要な担い手である。民俗学は、文献資料だけに頼らないオーラル・ヒストリーや口述の記録を大事にしてきたが、家・村の「永続性」に基礎をおいた村落民俗学ではなくて、都市民俗学の場合には、家族集団だけではなくて、同輩集団やメディアの影響による世代感覚、世代文化(「若者文化」などのサブカルチャー)の重要性が顕著である。

そして、「身体・場所・記憶」の重層性も考察されなければならない。身体・感覚のズレをジェンダー、階層、所属意識(アイデンティティ)などの社会的属性によって分析するアブロー

チが必要となるだろうし、場所についても、地域社会（コミュニティ）の捉え直しが必要である。現代社会においては、コミュニティ概念自体がバーチャル（仮想的）なものとして再構成されてきている。「小倉祇園太鼓」という世界も場所的であるだけでなく、バーチャルなものに転化しやすくなっている。都市祭礼もグローバルなコンテキストにおいて分析する必然性が出てきている。さらに、記憶の概念でも個人的記憶と集合的記憶の間に世代的記憶を加味して考察する必要があるのではないだろうか？小倉祇園太鼓を世代的に継承していく伝承や伝統は、若い世代の担い手にかかわっている。その意味でも、中野氏の「世代的考察」が重要になってくるのである。

いずれにしても、都市祭礼集団の実証的研究を手がけた米山俊直、都市祝祭論として分析した松平誠、アーバン・エスニシティ論として京都の左大文字を研究した和崎春日に並んで、本書・中野紀和の小倉祇園太鼓の研究は、都市祭礼研究史に残る業績であることは間違いないのである。

[本体価格：6,700 円]

(ありすえ けん 慶應義塾大学法学部)